

奄美大島における生物多様性の保全に関する研究

桑原季雄

A Study on the Preservation of Biodiversity in Amami-Oshima Island

KUWAHARA Suelo

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

奄美の生物多様性の保全の取り組みは、世界自然遺産の候補地になったことによって、活発になった。その特徴として、国や県や市の行政が、個人や大学、民間団体による希少動植物種の生息調査や分布調査等の生物多様性に関する調査結果を上手に活用しつつ連携して保全活動にあたっている点にある。

方法

リュウキュウアユとアマミノクロウサギの問題を中心に、前者は聞き取り調査により、また、後者は文献資料やウェブサイトの資料をもとに検討した。

結果と考察

1) 奄美の生物多様性の保全について、特にリュウキュウアユの保全活動においては、地域住民や民間の自然保護団体の間で活発な活動が見られ、河川工事の検討会においては行政関係者や業者と共同して計画の検討にあたるという場面が見られた。また、河川改修工事の際には、リュウキュウアユの産卵や生息に不可欠な「こもり」や瀬、淵といった地域住民の民俗知が、実際に河川工事に応用されたりしている。

2) リュウキュウアユの保全活動は「ヤジ友の会」を中心に活発に展開され、生物多様性の価値の啓蒙活動としては非常に大きな役割を果たしてきたと言える。また、ヤジ友の会の活動は、従来の伝統的な行事やイベントに代わる新しい住民の協働の機会でもあり、住民以外の多様な人々（ボランティアグループ、研究者、行政関係者、工事関係者、地域住民など）に開かれた新たな協働の場となっている。

3) 奄美の世界自然遺産に向けた取り組みは生物多様性の保全の問題であり、1970年代から80年代に見られた住民の間における利害の対立はなく、利害関係を超越して多くの人々が

対話の席につくことを可能にした。すなわち、奄美の生物多様性保全の問題は、「多様な主体が対話を交わすプラットフォーム」（及川 2010：25）となりえている。

4) 世界自然遺産登録の問題は、奄美の生物多様性の認識を深め、奄美の自然の世界的価値の認識や生物多様性の保全の活動への自主的な参加を促した。人々の奄美の自然に対する認識は、外からもたらされた開発・環境問題とともに深まっていたが、具体的な保全活動に発展するのは奄美大島が世界自然遺産登録の候補地となったことにより、奄美の生物多様性に対する認識の大きな覚醒があったからだと言える。世界に奄美にしかないというアマミノクロウサギやリュウキュウアユなどの野生生物の存在が、奄美の人々に奄美の生物多様性の価値や大切さの認識をもたらしてくれたと言える。

参考文献

- 奄美市・大和村・宇検村・瀬戸内町・龍郷町 2015. 奄美大島生物多様性地域戦略—自然と共に生きる奄美のしま創りプラン—. 90 頁, 奄美大島生物多様性地域戦略策定運用協議会, 奄美.
- 鹿児島環境学研究会編 2009. 鹿児島環境キーワード事典. 245 頁, 南方新社, 鹿児島.
- 及川敬貴 2010. 生物多様性というロジック. 186 頁, 勁草書房, 東京.
- 小野寺 浩 2009. 環境を軸とした奄美論. 「鹿児島環境学Ⅱ」(鹿児島環境学研究会編), 11-46, 南方新社, 鹿児島.
- 四宮明彦 2008. リュウキュウアユの魅力. 奄美ニューズレター, 34 : 11-15.
- 中野 実・塩崎博成・和田美智子・鍵和田敏子・四元健治・四宮明彦・島谷幸宏 2008. シンポジウム「奄美の地域づくりとヤジの再生」. 奄美ニューズレター, 34 : 25-39.